

八郎太郎伝説からみた十和田 a テフラの噴火とその災害

矢口 裕之

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 十和田 a テフラの噴火と年代
2. シラス洪水と八郎太郎の伝説
3. 十和田 a テフラとラハール
4. 八郎太郎の伝説と湖水形成譚

5. 八郎太郎の伝説と伝播

6. 伝説の背景

7. 十和田 a テフラの噴火と災害

おわりに

— 要 旨 —

平安時代に十和田火山から噴出した十和田 a テフラは、毛馬内火砕流堆積物やラハールが秋田県米代川沿いに大規模な土砂災害をもたらした。その降下火山灰は東北地方南部まで分布し、各地の古代遺跡で発見される。この噴火は十和田火山噴火エピソード A と呼ばれ、日本列島における有史以降で最大規模の噴火である。

江戸時代に米代川沿いのラハールから埋没家屋が発見され、これらは記録に残された。最近になって発見された埋没家屋は、胡桃館遺跡や道目木遺跡で発掘調査が行われた。

この地域に残された八郎太郎の伝説は、この土砂災害が地域に語りつがれた災害伝承ではないかと考えられた。

秋田県と周辺地域に広がる八郎太郎の伝説は、十和田 a テフラの噴出源や土砂災害が起きた河川の狭窄部が主な舞台であり、伝説の一部は噴火に伴う各地の災害を語り継いだ可能性が高い。伝説が残された地域の水系には、十和田 a テフラ起源のラハールが存在したことが想定される。

十和田 a テフラの噴火と北東北の広域にわたる土砂災害について、八郎太郎の伝説を通して検討し、新たな噴火と災害像を構築した。

キーワード

対象時代 平安時代

対象地域 北東北

研究対象 十和田 a テフラ 八郎太郎 火山灰考古学

はじめに

平安時代の十和田火山の噴火は、大湯火砕堆積物- 1 (大湯第1軽石)、大湯火砕堆積物- 2 (大湯第2火山灰)、大湯火砕堆積物- 3 (大湯第3軽石)が噴出し、大規模な爆発を伴って大湯火砕堆積物- 4、大湯火砕堆積物-Sと毛馬内火砕流堆積物が噴出した。毛馬内火砕流堆積物から上昇した火山灰は南南西方向に降下し、これらは十和田 a テフラと総称される。降下火山灰は東北地方南部まで分布しており、各地の遺跡から発見されている。

毛馬内火砕流と火砕流から発生したラハールは秋田県米代川沿いに及び、流域の花輪(鹿角)盆地から大館盆地にかけて土砂災害をもたらした。

この噴火は十和田火山の噴火エピソード A と呼ばれ、日本列島における過去2000年間の中でも大規模な噴火である(町田1995, 早川・小山1998)。

米代川流域では、江戸時代と現代にラハールから埋没家屋が発見された。江戸時代の発見は古文書に記録が残され、現代の発見例は北秋田市の胡桃館遺跡や大館市の道目木遺跡などで発掘調査が行われた。このような平安時代の埋没家屋に関連して、近年ではこの地域に残された八郎太郎の伝説は、平安時代の十和田火山の噴火災害が後世に伝えられたと紹介する書籍や広報物、Webのコンテンツなども多い。

筆者は十和田 a テフラと毛馬内火砕流、シラス洪水と呼ばれる毛馬内火砕流のラハールについて現地で野外調査を行い(第1図)、米代川流域と秋田県周辺地域に伝えられた八郎太郎や白髭水の伝説が十和田 a テフラの噴火に伴う災害伝承である可能性について検討した。また八郎太郎の伝説で湖水の形成に関係した地域について過去に災害が起きた可能性を検討した。なお、使用した写真

は全て筆者が調査中に撮影したものであり、空中写真はドローンや航空機から撮影した。

1. 十和田 a テフラの噴火と年代

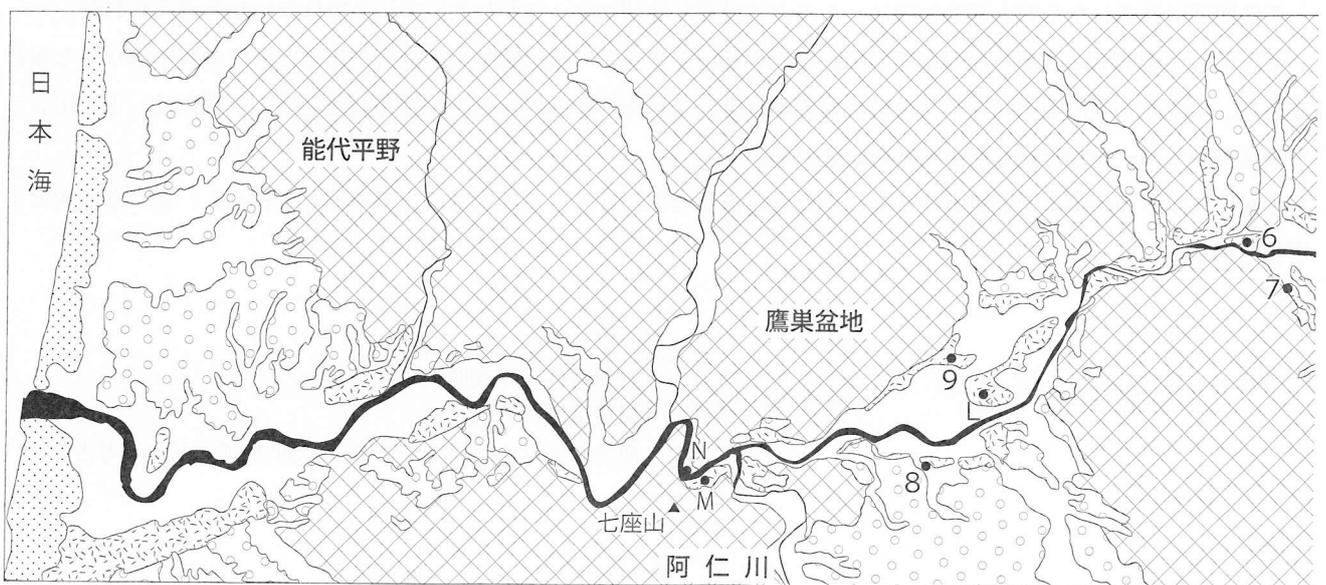
十和田火山は青森県と秋田県の県境に位置する活火山である。後期更新世の5.5万年前以降に大規模な噴火で十和田カルデラが形成され、1.5万年前には十和田八戸火砕流堆積物が噴出した(Hayakawa1985)。

十和田火山の後カルデラ期は、噴火エピソード L ~ A と二の倉スコリアの噴出があり、十和田 a テフラの噴火は最新の噴火エピソード A にあたる。これは古文書の記録に残されたイベントに比定され、噴火の年代は西暦915年と考えられた(町田ほか1981)。

十和田 a テフラは降下軽石と火山灰及び火砕流堆積物と降下火山灰から構成されるが、毛馬内火砕流と降下火山灰は同時期の噴出物と考えられた(大池1972)。その後、降下火山灰は東北地方の各地に分布することが明らかとなった(山田・井上1990)。

十和田 a テフラの噴出源である火口は、噴火の最後に御倉山溶岩ドームが火口を埋めて形成されたと考えられた(大池1976, Hayakawa1985)。また、十和田 a テフラの噴出火口は、十和田湖の中湖火口とも考えられた(町田他1981, 町田1995)。

最近の研究で御倉山溶岩ドームは、噴火エピソード D で形成されたことが明らかとなり、十和田 a テフラは中湖火口から噴出したと考えることが妥当であると考えられた(工藤2010)。また、噴出源周辺の噴出物層序を再検討した最新の研究では、十和田火山平安噴火(噴火エピソード A)の噴出物はプリニー式噴火とマグマ水蒸気噴火による6ユニットからなり、その噴火は中湖火口



第1図 毛馬内火砕流・ラハールの分布と調査地点 地形面区分は内藤(1963,1966,1970,1977)を参考にした。

でマグマ噴火とマグマ水蒸気噴火のサイクルを2度繰り返し、火砕流を噴出して終息したと考えられた(広井他2015)。

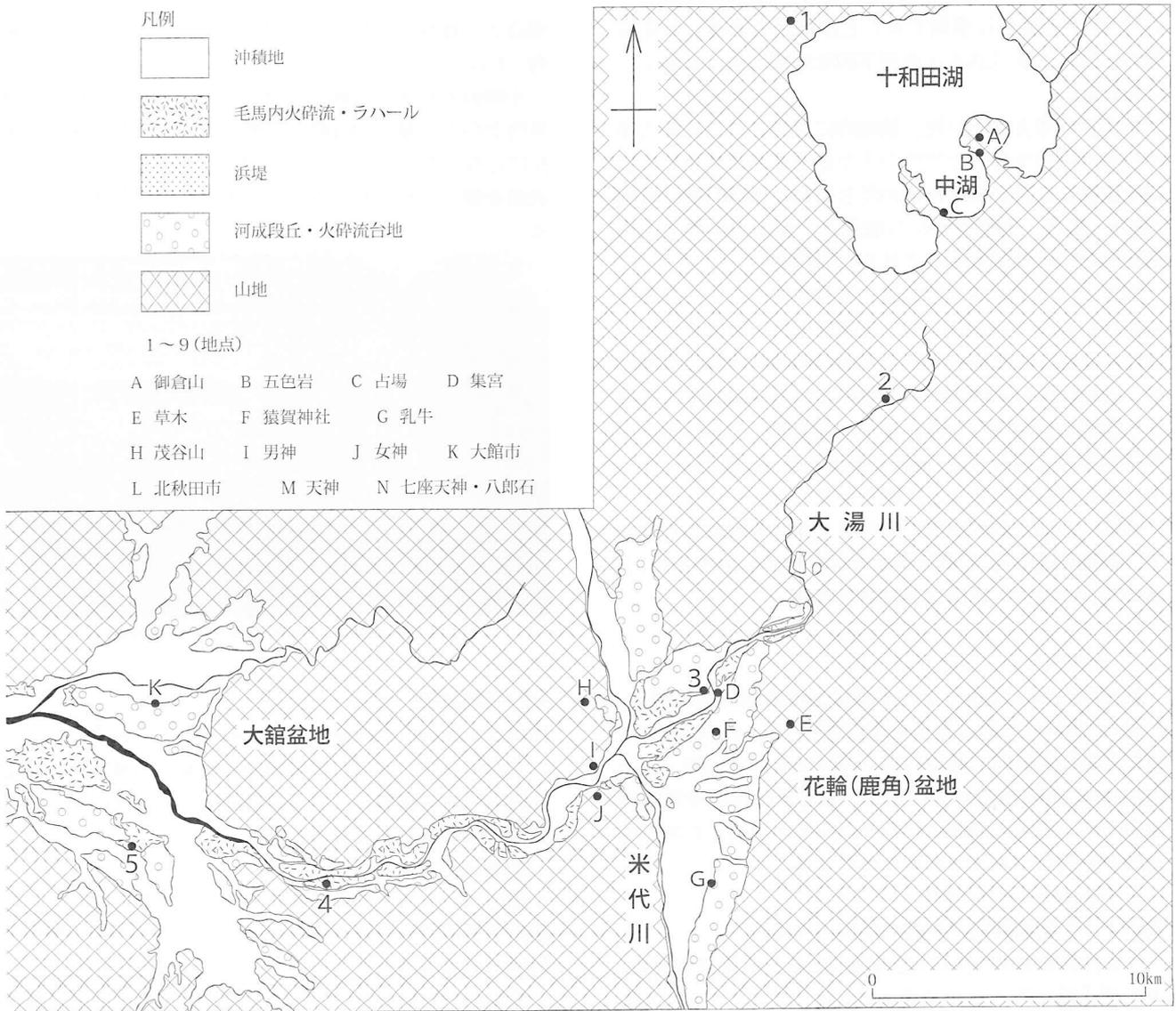
十和田 a テフラの噴火によりもたらされた米代川流域のラハールは、上流の大湯川流域で大湯軽石や軽石流堆積物から転化したシラス洪水と考えられた(平山・市川1966、町田1996)。またラハールは、毛馬内火砕流の二次堆積物ではなく、湖水を起源とする水分量が多い低温の火砕流堆積物との見解も提示された(町田1995)。

十和田 a テフラに関わる文献リストは2002年までのものが集成されている(小口2002)。考古資料や文献史料から十和田 a テフラの年代を論じたのは陸奥国分寺の発掘調査が最初である。七重塔基壇周辺に敷きつめられた厚さ9~18cmの白土は十和田 a テフラに対比され、テフラの年代はこれを挟む上下の文化層によって推定され

た。基壇を覆う焼土層は『日本紀略』の承平4(934)年の火災に比定された。また基壇下位の整地層に含まれる宝相花文や連珠文の軒瓦は貞観12(870)年以降の製造年代としたこと。このことから、白土の年代は10世紀前半と推定した(白鳥1980)。

胡桃館遺跡から出土した木材は、毛馬内火砕流のラハールで埋没した家屋の一部であり、部材の年輪年代は複数時に渡って公開された。机板(スギ)の最外年輪形成年は902年(奈良国立文化財研究所1990)、スギ材は672~900年の年輪形成年を示した(大河内2008)。このことからラハールの年代は10世紀初頭以降と考えられた。道目木遺跡からは1棟の埋没家屋が検出され(赤石1999)、家屋の部材(スギ)からは912年の伐採年が推定された(赤石他2000)。

十和田 a テフラの噴火年代は、これらの考古資料や文



献史料、年輪年代から延喜15(915)年に「出羽国に二寸の降灰があり桑が枯れた」との記述がある『扶桑略記』の噴火記録に比定するのが有力で(町田他1981,町田1995,早川・小山1998)、この年代は十和田aの噴火年代としてほぼ定説化している。

2. シラス洪水と八郎太郎の伝説

八郎太郎の伝説は、秋田県を中心に北東北の各地に伝えられた物語で、話し言葉を媒体にする点で文字を媒体として伝わる文学とは異なり、伝承文学と呼ばれる文芸である。八郎太郎の話は、別名「三湖伝説」とも称される壮大な物語群から構成される。

八郎太郎の伝説と十和田火山の噴火によるシラス洪水には何らかの関連があるのではと考えられた(平山・市川1966)。これは物語に登場する八郎太郎と南祖坊が争う場面が火山噴火を思わせることや八郎が八郎瀧へと移動する際に河川を堰き止める話(以下、湖水形成譚と呼ぶ)がシラス洪水に重複することが理由である。八郎太郎の伝説とシラス洪水は地質学的な解釈によって結びつけられた。

平山らの考えはその後、積極的に評価され、八郎太郎の伝説は災害を受けた当時の人々が驚きの目で自然の猛威を観察し、言い伝えたためだとされた(町田1995,町田1996)。また、文献史学から地震と十和田火山の火山活動を結びつけた論考もなされた(伊藤1996)。

最近になって八郎太郎伝説と埋没家屋について詳細な検討が行われた(荒谷2009)。荒谷は近世以降に米代川流域から発見された埋没家屋と平山らの論考を詳しく検討し、近世以降の八郎太郎の伝説について文献史学の立場から整理と検討を行った。また八郎太郎の伝説は国文学や宗教学の立場からは「宗教上の出来事」を物語風に作り上げたと解釈されることを明らかにした。

なお、八郎太郎の伝説に関する文献は多岐にわたるので、県別に主要なものを挙げる(川合1970,戸川1975,小館1976,小形1976,森山1976,木崎1976)。

3. 十和田aテフラとラハール

秋田県花輪盆地から能代平野に至る米代川の流域は、1960～70年代に段丘地形の研究が精力的に行われた地域である(内藤1963,藤原1966,内藤1966,白井1966,平山・市川1966,内藤1970,内藤1977)。現地での地形や露頭の観察から毛馬内火砕流に伴うラハールが形成した地形や遺跡と伝説が生まれた場所を検討した。

(1) 十和田カルデラ周辺

地点1：十和田湖滝ノ沢峠の毛馬内火砕流

十和田湖の中湖火口の北西対岸にあたる滝ノ沢峠は、カルデラ壁に相当し、国道454号沿いに厚さ7mの毛馬内火砕流が露出している(早川(1993)の14地点)(写真

1)。湖を渡った火砕流には、直径3cm大の灰色軽石が多く含まれ、基質は細粒火山灰からなる。毛馬内火砕流は、峠を越えて青森県側の浅瀬石川水系に達したものと考えられる。



写真1 滝ノ沢峠の毛馬内火砕流

地点2：鹿角市十和田大湯白沢(大湯川)の大湯火砕堆積物-1とラハール

十和田カルデラ南縁から流れる大湯川沿いの白沢では黒色土の上に厚さ10cm軽石と紫灰色火山灰が成層し、上位には厚さ40cmのラハールが露出している(写真2)。地表面を覆うラハールは直径10cm大の亜円礫が多く含まれる。

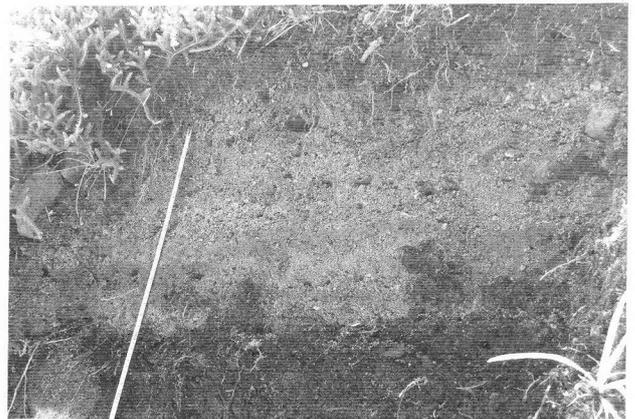


写真2 鹿角市十和田大湯白沢の大湯軽石

(2) 花輪盆地

地点3：鹿角市大河原(大湯川)の毛馬内火砕流

大湯川右岸の大河原で堆積面を形成する厚さ2mの毛馬内火砕流が露出している(写真3)。火砕流には、直径2cm大の軽石が多く含まれる。

花輪盆地北部の大湯川沿いは、十和田カルデラに近く十和田八戸火砕流堆積物やそのラハールが形成した高位段丘と低位段丘を構成する毛馬内面が見られる。地点3付近の毛馬内面は、毛馬内火砕流が形成している。

毛馬内火砕流のラハールは花輪盆地内で火砕流堆積物からラハールに変化するものと考えられるが、この付近

が火砕流堆積物の末端部と考えられる。花輪盆地のラハールは、米代川に小坂川や大湯川が合流する末広付近を頂点にして掌状に分布し、盆地の低位面である毛馬内面を形成している。

米代川はこの付近で県境の水系が北・東・南から合流



写真3 鹿角市大河原の毛馬内火砕流

し、流量を増して山地の河川狭窄部を通過している。このことから、毛馬内火砕流の堆積により大湯川は急激な土砂の供給を受け、土石流河川となって末広付近で急激な河床の上昇をもたらした可能性が高い。

花輪盆地は盆地の出口にあたる米代川狭窄部の閉塞によって氾濫原が形成され、一帯を滞水させてラハールが堆積したものと考えられる。

(3)花輪～大館盆地、米代川の十二所狭窄部

花輪盆地から大館盆地に至る米代川は、山地内の溪谷を蛇行している。この地域は高位段丘が認められず、現河床に近い低位面の毛馬内面が両岸に分布する。

河川の狭窄部に毛馬内面が形成されたのは、米代川が最近まで山地を削って形成した浸食面を急激にラハールが覆ったためであろう。これはラハールによって下流側の大館盆地の河床勾配が上昇し、この地域の米代川の土砂運搬量に対して堆積量が卓越したためかもしれない。

地点4：大館市道目木遺跡

大館盆地に近い米代川左岸に位置する道目木遺跡では、平成11(1999)年に圃場整備の工事でラハールから埋没家屋1棟が発見された(赤石1999)。検出された建物は平地式建物で、地面にスギを製材した床板材を敷いている(高橋2006)。建物からは土器や木製品が出土した(板橋2000)。

道目木遺跡が立地する毛馬内面は、標高75mの米代川沿いの低位面からなる。周辺には標高80m前後の中位段丘が段丘崖を伴って接し、南側から山地の北縁を開析した小河川が谷を形成している(写真4)。このことから道目木遺跡の集落は、水田可耕地と想定される米代川沿いの低地の縁に存在し、背景に畠作地が想定される台地と接し、水田経営に必要な小河川の水系沿いを選択して営

まれたものと想定される。

(4)大館盆地



写真4 道目木遺跡

大館盆地の中央を流れる米代川には、大森川や長木川が合流し、十和田八戸火砕流堆積物やそのラハールからなる高位段丘が分布する。米代川の左岸には広い範囲に毛馬内火砕流のラハールが堆積し、毛馬内面を形成している。毛馬内面の各所からは江戸時代に埋没家屋の検出が相次ぎ、記録に残された。

十和田火山の噴火から1100年が経過した今(2015)年は、秋田県埋蔵文化財センターの確認調査により大館市でラハールに埋没した竪穴建物が検出された。新聞等で報道されたことで大きな関心呼び、11月に行われた現地説明会には、雨天の中で大勢の市民が訪れた(写真5)。地点5：大館市片貝家ノ下遺跡



写真5 片貝家ノ下遺跡の現地説明会

遺跡は、米代川から2kmほど離れた引欠川と犀川に挟まれた毛馬内面に位置する。調査では平安時代の竪穴建物12棟が検出され、そのうち3棟がラハールより埋没した竪穴建物である(秋田県埋蔵文化財センター2015)。S13竪穴建物は、ラハール中に屋根が残された状態で埋没しており、屋根材が変化したと考えられる暗灰色シルトが「ハの字」状に断面で観察される。屋根の上位には、細粒の黄褐色軽石質火山灰からなる降下火砕物が認めら

れ、建物が十和田 a テフラ降下後にラハールによって埋没したことが明らかである。遺構は3ヘクタールに及ぶ事業地から遺跡の確認調査で発見されたもので、今後の発掘調査の行方が注目される。

片貝道ノ下遺跡は調査途中であり、集落の全貌は明らかでないが、さらに低い場所で引欠川が形成した谷が検出されたという。遺跡は周辺に中位段丘が接し、段丘上は縄文時代の狩猟地や平安時代の集落遺跡である片貝遺跡が立地する。

このような遺跡の立地条件は、前述の道目木遺跡と共通しており、背後に高台をひかえて、河川が形成した低地の水田可耕地の近くに集落が形成されたものと想定される。

これらの集落の在り様は、この地域における古代の農耕開発の途上にある開拓集落の姿を現しているものと想定される。

地点6：大館市岩瀬赤岩神社のラハール

米城川右岸の岩瀬では川沿いに毛馬内面を形成する厚さ2mのラハールが露出している(写真6)。ラハールは成層し、直径2～1cm大の軽石が多く含まれる。周辺からは江戸時代に埋没家屋6棟が発見されたという(高橋2006)。



写真6 北秋田市岩瀬 赤岩神社のラハール

地点7：大館市大披

米代川沿いの埋没家屋は現在まで9遺跡から発見されている(田口1987,高橋2006)が、大館市引欠川沿いの大披(写真7)では、安永4(1775)年に家屋4棟が発見され、家具や農具が出土した。周辺を踏査すると畑の表土にラハール起源の灰色軽石が多く散布しており、地形面が軽石を多く含む堆積物で形成されたことを示唆する。また大披付近の毛馬内面は、引欠川の浸食により数mの比高差をもつ段丘崖が形成されている。江戸時代に発見された家屋は段丘崖の何れかから掘り出されたものであろう。

大披集落に近い場所から慶応年間に埋没家屋が検出され、曲げ物などの遺物が出土したという。向田崖付近は

引欠川沿いに比高差のある段丘崖が認められる。



写真7 大館市大披の毛馬内面

(5)鷹巣盆地

鷹巣盆地の南寄りを通る米代川には、南から小猿部川や阿仁川が合流し、阿仁川右岸の大野台には4面の段丘面が分布する。

米代川の両岸に広がる毛馬内面の微高地にはラハールが堆積しているが、中央部の広範囲は開析を受けて谷底となっている(写真8)。



写真8 上空から鷹巣盆地を望む

米代川は鷹ノ巣盆地の西側で再び山地の狭窄部を通過する。二ツ井町の七座山北方は溪谷となっており阿仁川と合流した米代川は幅300mほどの河道となり、粕毛川の合流部から再び川沿いの低位面を形成しながら日本海側の能代平野に至っている。

大館～鷹巣盆地周辺に堆積したラハールは、花輪盆地の末広と同様に七座山付近の河川狭窄部の閉塞により盆地内の広範囲に分布している可能性が高い。

地点8：北秋田市小勝田(小ヶ田)

文化14(1817)年に埋没家屋3棟が発見されたといい、有名な菅江真澄の埋没家屋図が残されている。小勝田付近の毛馬内面は、小猿部川が形成した谷底平野を埋めるように低位面が広がり、河川沿いには開析された崖地形が存在する。現在では植生に覆われ、詳細な地形観察が

困難である(写真9)。

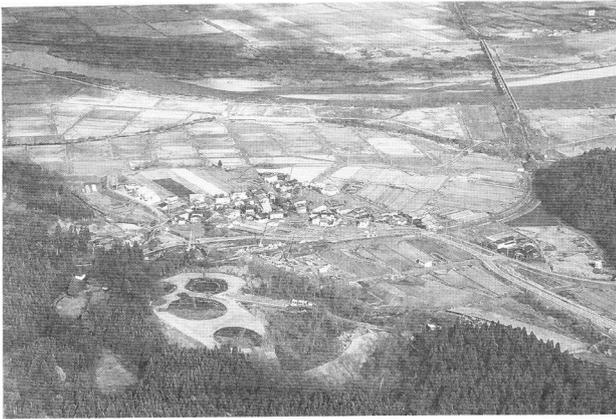


写真9 上空から小勝田を望む

地点9：北秋田市胡桃館遺跡

胡桃館遺跡は、昭和36(1961)年に鷹巣中学校に隣接する野球グラウンドの整備で土器が出土し、昭和38(1963)年に建物の一部が発見された。昭和42～44年度(1967～70)に行われた発掘調査ではラハールから4棟の建物と柵が発見され、土器や木製品、墨書土器や墨書された扉板が出土した(秋田県教育委員会1968, 1969, 1970. 北秋田市教育委員会2008)。

遺跡は市街地の北西部にあり、現状も市立鷹巣中学校に隣接するグラウンドで、現地には秋田県指定文化財となった出土物や家屋の部材が保存されている(写真10)。

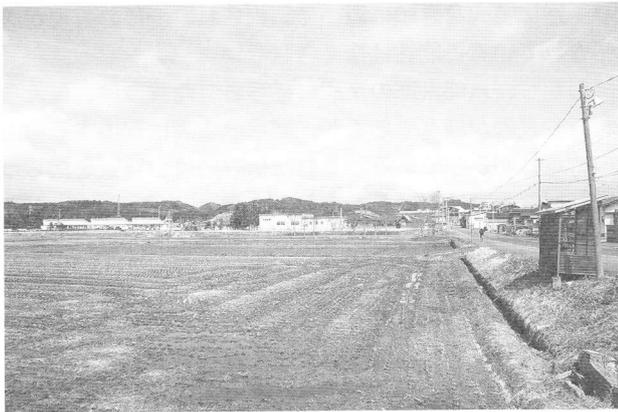


写真10 胡桃館遺跡

4. 八郎太郎の伝説と湖水形成譚

(1) 文字に残された八郎太郎

秋田県を中心に青森県や岩手県に伝わる八郎太郎の伝説は、様々な物語の型式を有するが、一般には秋田県米代川を舞台にした話に代表されている。これは八郎が十和田湖から八郎瀧へ移り、やがて田沢湖に至ったとする三大湖沼の物語が後世になって誕生したからであろう。

主人公の八郎太郎や南祖坊が登場する記録は、古いものでも江戸時代中期に遡り、享保16(1731)年の『津軽一統志』や延享元(1744)年の『柞山峯之嵐』、明和3(1766)

年の『出羽秋田七座山天神宮縁起』や天明8(1788)年の菅江真澄による『いわてのやま』などがあげられる(荒谷2009)。

また寛政年間(1789～1800)の『封内郷村誌』にも記述があるという(坂本1996)。荒谷も坂本も八郎太郎伝説の起源は『三国伝記』にあるとし、16世紀前半、天文年間の『津軽郡中名字』にも記述があるので、これらは15世紀前半に近江の善勝寺の僧玄棟による『三国伝記』に遡るとされた(佐々木1990)。

文字で伝えられた八郎太郎の伝説に対して民話として各地に伝えられた伝承文学は、話の内容や表現も多岐にわたる。最近になって編集された伝説は、現代的に話が解釈されている可能性もあるので資料の扱いには注意が必要である。

(2) 八郎太郎の伝説

本文では多岐にわたる八郎太郎の伝説から湖水形成譚に関して詳しく伝えているものを抜粋し、概要を紹介する。ここで引用したのは秋田県大湯村総務企画課(2008)が作成した「八郎太郎伝説」をもとに再構成したものである。

十和田湖に近い鹿角市草木で生まれた八郎太郎は、山の仕事で仲間と十和田の山奥に行きました。八郎太郎が炊事の際に仲間の分まで焼いたイワナを食べてしまうのが渴き、沢の水を飲みほした。すると八郎太郎は龍に変わってしまったのです。仲間と別れた八郎太郎は山の中に逃げ込んで沢を堰き止め十和田湖をつくり、その主となったのです。

あるとき南部の出身で熊野の修業僧であった南祖坊は、十和田湖を訪れ、ここがお告げにあった永住の地と悟りました。こうして龍になった八郎太郎と南祖坊は十和田湖を争って壮絶な戦いとなりました。

八郎太郎は八つの頭をもつ龍にかわり、南祖坊と戦いました。静かな湖は急に荒れ狂い、雷鳴が響き、山々が鳴動しました。戦いは七日七晩続きましたが、最後は南祖坊の力が勝りました。八郎太郎は力尽き、十和田湖を血で赤くに染め、湖を去ったのです。

勝者の南祖坊は、十和田湖へ沈み、湖の新たな主となりました。湖を追われた八郎太郎は故郷の鹿角に戻りました。米代川の雄神と雌神の間を堰き止めて湖をつくり、ここに安住したいと思いました。

八郎太郎は毛馬内の茂谷山に縄をかけて背負い川を堰き止めようとしていました。

鹿角の神様達は大湯のお宮に集まり八郎太郎を追い出すための相談をしました。そして鍛冶屋に金槌などをつくらせ、八郎太郎がせき止めた場所を壊しました。

鹿角の神様達に妨害された八郎太郎は、さらに米代川沿いに下って行きました。

鹿角を追われた八郎太郎は、きみまち坂付近で蛇行している米代川を堰き止めて湖にしようと思いました。七座山の神様達は相談し、天神様が八郎太郎と大きな石の投げくらべをすることになりました。八郎太郎が投げた石は米代川に落ちました。天神様は、大きな石を軽々と投げ、それは米代川を越えていきました。八郎太郎が驚いていると天神様は、川を堰き止めた堤防を、たくさんの白ネズミによって穴を開けさせました。八郎太郎は、ここでも神様達に邪魔をされ、さらに下流へと行きました。

八郎太郎は天瀬川で老夫婦から一夜の宿の世話を受けました。八郎太郎はお礼として、明日の朝、鶏が鳴くと同時に大地が裂け、この地が大きな湖になると秘密を打ち明けます。老夫婦は八郎太郎の好意を受け、鶏が鳴く前に逃げることにしました。

翌朝、鶏が鳴くと大地は大きな湖となったのです。しかし、お婆は裁縫道具を家に取りに戻っていました。八郎太郎はお婆を助けようとして、お婆を対岸の芦崎に飛ばしてしまいました。

老夫婦は助かりましたが、川を挟んで離ればなれになり、お爺は天瀬川の南の夫殿権現に、お婆は芦崎の姥御前神社になりました。そして、この地域では鶏をタブーとし、鶏を飼うことを禁じられました。こうして、現在の場所に八郎湯が誕生し、八郎太郎はここを永住の地としたのです。

(3)伝説の風景を読み解く

十和田湖

八郎太郎と南祖坊が十和田湖の覇権を巡って争う場面は、原典である『三国伝記』で「食食事七日七夜ナリ。動揺スル事雷轟如、力耀電光ニ似タリ。遂ニ八頭ノ龍食イ負テ、曳大海ニ入ントス。」とある(荒谷2009)。

この場面は火山噴火を表現したものと解釈され、八郎太郎の伝説とシラス洪水を結びつけた原点である(平山・市川1966)。しかし天変地異を表す表現に雷鳴や電光などをを用いることは多くの伝説や民話に共通するので、これをもって噴火の状況と断定することは憚られる。

「秋田の昔話・伝説・世間話 口承文芸検索システム」に収録された『伝説乃鹿角』は、鹿角郡教育会が1931年に発行し、宮川村大日堂由来記に書かれたものが掲載されたもので以下に抜粋する。

「八頭の龍蛇かけ来たりて曰く「ここは我が凄居なり。とくとく立ち去らぬにおいては、唯一口の餌食ぞ。」怒号終わるや否や荒れたる湖上に16の角をさらけ、八つの頭を持つ大蛇現れ、南祖坊に飛びかかろうとした。南祖坊は動ずる色なく、法華経八巻を誦え大蛇めがけて投げ、互いにしのぎを削りて合い戦う。八龍もたまりかね大血を引いて御倉山から何処ともなく逃げた。天より童子一

人舞下って言うとおりの、南祖坊は湖底に飛び込めば朽の大木生えていた所を己が住家と定めた。」(あらすじ)

また、鹿角市史では八郎太郎と南祖坊の争いが実に詳細に記述されており、興味深い。

「南祖坊は津々浦々をめぐり歩き、十和田湖へ来た時、洞窟の中に鉄のわらじを見つけた。ここがお告げの場所かと、岩頭で経を読み始めると、湖底からさっさと立ち去れとの大音声が響いた。神のお告げで自分が湖の主になると告げると、八つの頭と十六本の角を持つ巨大な龍があらわれ、火をふく舌を捲きあげて飛びかかってきた。

南祖坊が静かに経文を読むと、その一字一字が剣となって八郎太郎の蛇体につき刺さった。そして経を衣の襟にさすと南祖坊も九頭の龍となって戦う。八郎太郎は着ていたケラの毛一本ずつを小さい龍にしてかみつかせる。激しい闘いは七日七晩におよんだが、ついに八郎太郎が真っ赤な血を流しながら御倉半島をはい上がり、逃げ去った。五色岩、千丈幕、赤根岩が赤いのはその血の跡である。南祖坊は最も深い中の湖にひそみ、湖の主となった。(『草木の八郎太郎』要約)」(鹿角市1996)。

鹿角市史の出典は『草木の八郎太郎』の要約とされているが、解説で十和田山の噴火や軽石流、川に沿って流れたシラス洪水の有様が伝説となった可能性を触れており、逆に噴火を念頭に置いて編集され、一部の表現が誇張されている可能性は捨てきれない。

しかし、八郎太郎の伝説に描写された舞台は、伝えられ方や表現が様々であるが、湖水形成譚に登場する場所の特定は明らかである。これは伝説の舞台背景を指し示す指標なのではないだろうか。

八郎太郎が血を流した場所は、御倉半島周辺の五色岩などである(写真11)。南祖坊は勝者として青龍権現になり十和田神社に祀られるが、神格化の象徴である入水地は占場(写真12)と伝承されている(小館1976)。

そしてこれらの場所は明らかに十和田火山中湖火口の西と東岸に位置しており、広大な十和田湖の中で伝説の風景が中湖に限定されることは明白である(写真13)。

花輪盆地

十和田湖を追われた八郎太郎は、花輪盆地北部で湖水形成譚展開する。ここでも盆地周辺の地名が記されており、容易に伝説の場所が特定できる。前出の鹿角市史には以下の続きがある。

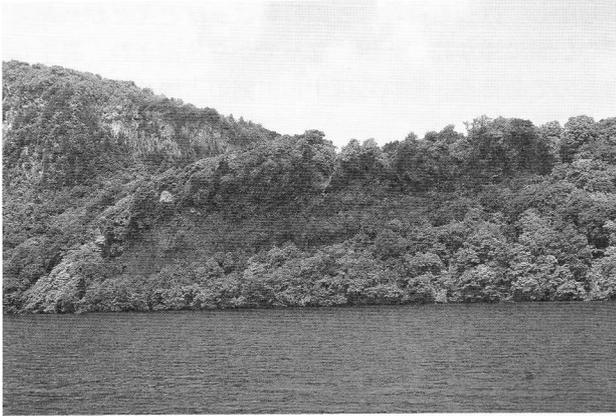


写真11 御倉山と五色岩



写真12 十和田湖の占場

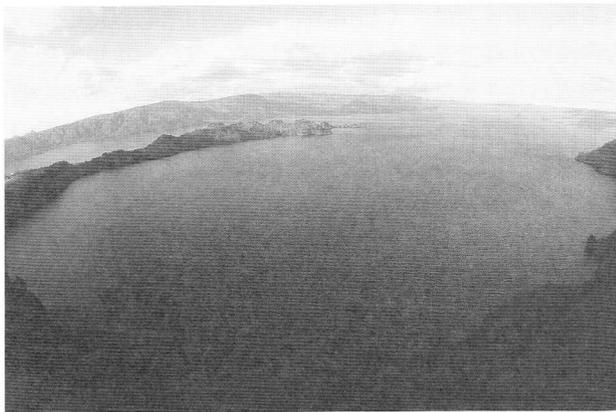


写真13 瞰湖台から中湖火口を望む

「さて敗れた八郎太郎が生れ故郷へ帰り、高い山へ登ってあたりを眺めると、西の方で米代川、小坂川、大湯川の三つの川が合流する、男神、女神のせまい谷あいが見についた。そしてあの谷間を埋めて三つの川の水をためれば、大きな湖もできると考え、毛馬内の茂谷山を運ぼうとブドウのツルを集めて長い綱をない始めた。

鹿角の四十二人の神々はこれを知って驚き、大湯の下の方に集まって評定した。集宮の地名はこのことによる。そして八郎太郎へ石の礫をぶつけることに決め、石を切

り出すために花輪福士の日向屋敷にいた十二人の鍛冶にカナヅチ、ツルハシ、タガネなどを沢山作らせ、牛につけて集宮まで運ばせた。あまり重たいので血を吐いて死ぬ牛がおり、そこは血牛 — 乳牛と呼ばれている。これに気づいた八郎太郎は、あきらめて茂谷山の中腹にかけた綱をほどいたが、その跡は今でも残って見える。」(鹿角市1996)

伝説の場面に登場する男神と女神の谷は、米代川の末広の狭窄部(写真14)に比定される。谷の北にある茂谷山(茂谷山から石を)を運んで盆地の出口を堰き止める計画は、現代のダム建設にも通ずるものがあるだろう。

伝説の中身は漠然とした絵空事を展開するものだが、部分的に狭い範囲を示した地名や象徴的な地形を示唆して、何かを伝えていることにどのような意味があるのだろうか。

物語の冒頭で語られる八郎太郎の生誕地は鹿角の草木とされる。この場所は大湯に近い山麓の小集落で、十和田や鹿角を一望する高台である。これこそはこの伝説の舞台を見渡した大きな風景の視座を示唆するものかもしれない。



写真14 上空から末広を望む

大湯の集宮は鹿角の神様が集まった場所とされ、現在も大湯川沿いの小丘にお宮がある。ここは毛馬内火砕流が堆積した低位面に浮き出た孤立丘である(写真15)。大湯川沿いに達した毛馬内火砕流は、わずかな標高差で集宮を埋めきれなかった。火山島のハワイではこのような場所をキプカと呼び、溶岩に取り残されたオアシスのような意味がある。

これらの知見は現代の自然科学的な視点から導き出されたものだが、伝説に埋めこまれた位置情報は現代の科学的観察のポイントに十分に符合する。こうしたことから伝説の中に埋め込まれたメッセージは、過去の自然現象を伝えるために残されたキーワードではないかと類推させる。

七座山

花輪盆地を追われて米代川を下った八郎太郎は、比内地方に湖水を形成しようとして、ここでも地元の神に追われる。



写真15 集宮神社

「秋田の昔話・伝説・世間話 口承文芸検索システム」に収録された『二ツ井町史』から引用した物語は、以下が要約である(二ツ井町町史編さん委員会1977)。

「比内は一大湖となり八郎太郎の安住の所となった。八座の神様は太郎を他に移したいと相談したがまとまらず、七座の神様に任せることにした。

天神様が八郎太郎に力比べを持ちかけ、八郎の投げた石より大きな石を投げ、八郎はびっくりした。

すると天神様は男鹿半島の方にひろびろした所があるのでお前の住家にすればと言い、米代川の浅い水で進むことができない八郎のため、神々に話し、湖水を作っている白ネズミに山に穴をあけるよう命じた。ネズミは水を通し、八郎太郎は波に乗って濁流を下った。」

大館や鷹巣盆地でも湖水形成譚が継続し、伝説の舞台は七座山のきみまち阪に移動する。この付近で阿仁川が合流した米代川は、大平山地や白神山地を刻んで蛇行しながら大きな谷を形成する。この山間を通過した米代川は上流の内陸盆地から下流の能代平野からなる海岸平野に至って日本海に達している。

花輪盆地から流れたラハールは、大館盆地や鷹巣盆地で氾濫し、広範囲を滞水させた。急激に埋め立てられた集落の一部が埋没家屋として保存された。こうした洪水の元になる土砂ダムが推定される場所は、七座山の麓にある米代川の狭窄部にほかならない。

この地には米代川の右岸に七座神社が鎮座し、七座神社は別名が天神七座神社や七座山天満宮と呼ばれることから物語の天神様に比定される。また川の中には八郎太郎の投げたと伝わる巨石も存在しており(写真16)、両岸に伝説の痕跡が残されている。

しかし、巨石も神社などの痕跡は、ほとんどが八郎太郎の伝説に導かれ、後世になってから比定され、誕生したものであろう。それらは十和田湖の占場や南祖坊の縁



写真16 八郎太郎の投げた石と七座山

起を持つ十和田神社、花輪盆地の集宮や草木も同じことだと思われる。

それではこれらの伝説地はまったく荒唐無稽なもののだろうか。逆説的に考えれば、それぞれの場所が人々によって古代から言い伝えられた場所であるから、後世になって痕跡が生まれ、保存されたのではないだろうか。やはり火のないところに煙は立たないのである。やはりこれらの場所は、伝説の指し示すところに他ならないのではないと思われる。

このように米代川流域に伝わる八郎太郎の伝説に見られる湖沼形成譚は、十和田湖の中湖火口を起点に毛馬内火砕流の末端である大湯川を介して、ラハールが堆積面を形成した花輪盆地や鷹巣盆地の河川狭窄部に話の主要ポイントが存在する。そして伝説が示した地名や地形のキーワードは、過去に起こった何かを伝えるための伝承である可能性が極めて高い。

そしてこれらの伝説の舞台が十和田火山平安噴火の災害地域に重複していることは、紛れもない事実と考えるとよいだろう。

5. 八郎太郎の伝説と伝播

(1)各地の湖水形成譚

八郎太郎の伝説は、米代川流域や八郎瀧、田沢湖を舞台にして多くの物語が残されているが、隣接する青森県や岩手県の一部にも八郎太郎の伝説が伝えられている。

特に地元の神々に妨害されて湖水形成を断念する話は、米代川のそれと類似したり、重複したりしている。このような湖水形成譚は青森県岩木川の相馬、平川の大鱈、浅瀬石川の黒石、南部地方の五戸川の倉石、馬淵川、新井田川の島守、岩手県紫波町の北上川犬吠森などで認められ、各地に八郎太郎が河川を堰き止める場所が存在する(小館1976)。

(2) 浅瀬石川の黒石

青森県黒石市に伝わる八郎の伝説は、八郎の出身地が黒石となっている。

現在の黒石温泉周辺の浅瀬石川を堰き止めようとした八郎は、中野不動に咎められ上流の一ノ渡村で再挑戦する。ここでも十和田様に叱られたので十和田湖に逃げ込む(坂本1996)。これ以降の話は南祖坊との争いから八郎瀉へと発展し、米代川流域の物語を共有している。

同じ黒石でも八郎の展開が異なる話もある。十和田湖での南祖坊との争いから逃れた八郎は、浅瀬石川に合流する中野川を堰き止めようとするが、中野不動に追い払われる。再度にわたり八甲田山の合子沢川上流のコツメでも挑戦するが、ここでも八甲田の神様に怒られて追い出されてしまう(森山1976)。

また、八郎は平川流域の大鱈、古懸、碓ヶ関に湖水をつくらうとしたが、古懸の不動に妨害され、大鱈の大日様に導かれて八郎瀉へと辿り着く(森山1976)。この展開では、話に南祖坊や十和田湖が登場しない。

黒石温泉には、八郎の堰き止めの舞台となった場所が伝わる。中野不動の周辺には八郎が笊(エビ)で土を盛ろうとした跡の小山が、蛾虫の一エビと呼ばれている(写真17)。この場所は八甲田山を上流域とする中野川と浅瀬石川の合流点に相当し、中野不動が鎮座する。また浅瀬石川上流の一ノ渡には、蛾虫坂から運んだ土がこぼれた小山があり、川には八郎石があったとも伝えられる。



写真17 黒石温泉の蛾虫の一エビ

(3) 岩木川の西目屋

岩木川の上流にある青森県西目屋村に伝わる八郎の伝説は、八郎の出身地が西目屋村になっている。目屋の谷川を堰き止めようとした八郎は、岩木山の神に追われる。再び大鱈で平川を堰き止めようとした八郎は、阿闍羅権現に叱られて十和田湖に逃げ込んだ(森山1976)。これ以降は南祖坊との争いから八郎瀉へと移動する展開となる。

西目屋村西部の見返り坂は岩木川が溪谷を刻み、河床には八郎岩が残されている(写真18)。岩木川は白神山地

の溪谷を通過し、盆地内で蛇行しながら段丘面を形成する。いわばこの周囲は、山地と台地の境界に位置する河川流域に属している。



写真18 岩木川の八郎岩

(4) 新井田川の十日市・島守

青森県八戸周辺や新井田川の島守盆地には八郎や八ノ太郎の伝説が残されており、八郎の出身地は八戸の十日市や島守とされている。

島守の八ノ太郎は是川を堰き止めようとして夜に土を運ぶが、島森の神様が相談して虚空蔵様が真似た鶏の声に頓挫する。八ノ太郎は十日市に逃げたが犬に吠えられ、さらに鳥屋部岳に逃げた(森山1976)。

八ノ太郎が八戸の蟹沢川を堰き止めようとして、土を運んでモリを作った。明神様の別当の飼犬が八ノ太郎を吠えて追い払った。モリは犬森と呼ばれた(森山1976)。

島守で生まれた八郎太郎は、鍬で掘った土をモッコで運び、巻に山を盛って新井田川を堰き止めようとした。島守四十七社の神様は島守という森に集まって相談し、八郎太郎を十和田湖に追い出した(南郷村中央公民館1982)。

これらの伝説に残された地名はそれぞれ現存し、新井田川と蟹沢川が合流する地点が十日市である。十日市を流れる蟹沢川右岸には犬森が望める(写真19)。

島守盆地を流れる新井田川は、南郷村巻から新井田川溪谷を通過し、丘陵を穿入蛇行している(写真20)。

島守の巻は、新井田川が盆地を通過して溪谷に入る河川狭窄部にあたり、それは米代川流域の花輪盆地末広と同じ地形的な環境にある。

(5) 相坂川(奥入瀬川)の十和田市大和田

十和田市大和田の沼は、八ノ太郎が休んで腰を下ろした場所が沼になったという。相坂川の水を飲んだ時ついた手形や歩いた足跡がオノ神や東山に残された(森山1976)。

十和田市大和田の沼は、現地の踏査で特定できなかった。しかし、相坂川左岸に鎮座する大和田神社の南側

は、相坂川の段丘が河川によって浸食されて東西270～340m、南北340mの馬蹄形の凹地を形成している。この特異な谷が八ノ太郎の伝説の沼ではないだろうか。

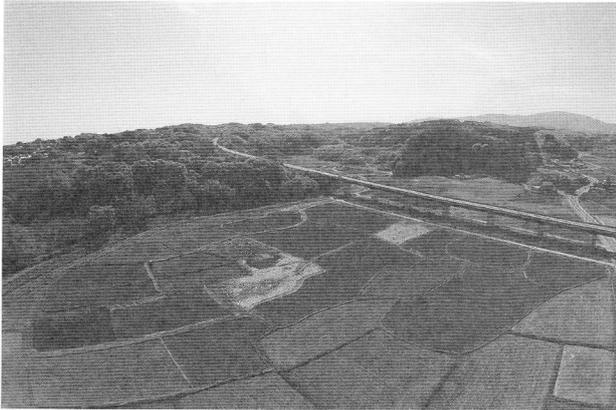


写真19 上空から十日市と犬森を望む

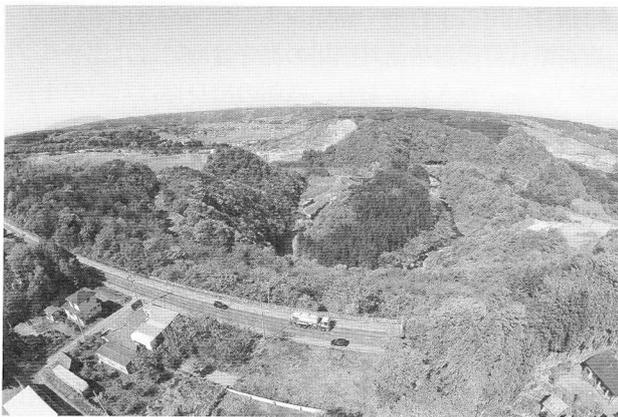


写真20 上空から島守盆地巻の溪谷を望む

(6) 白髭水と猿賀神

青森県津軽地方に伝わる白髭水伝説は、八郎太郎の伝説と直接の関係はなく、いわば花輪(鹿角)と津軽を舞台とした洪水伝説の一つとして関連するかもしれない。

蝦夷を攻めた上毛野田道は陸奥で戦死し、その墓を暴いた蝦夷は大蛇と化した田道の霊に襲われた。田道の霊は大湯に近い鹿角の猿賀野に祀られたが、欽明28(567)年に津軽や南部地方に白髭水と呼ばれる大洪水がおきて田道の霊は津軽に流れ着いた。

それは現在の平川市尾上の権現平で、白馬に乗り春の流木を舟として大石の上に神が現れたという。これを近くに祀ったものが猿賀神社である(川合1970, 坂本1996)。

猿賀神社が鎮座する平川市尾上は、浅瀬石川と平川に挟まれた扇状地に位置し、両河川の氾濫源とは距離がある。また、秋田県鹿角と両水系の間には山地があり、山を越えてくる洪水は常識的には考えにくい。しかし、火山噴火で生じたシラスを白髭水や白髪水と表現することがあり、十和田湖の20～30kmの範囲にある水系での事例であることから、火山災害を別の視点で表した伝説な

のかもしれない。

6. 伝説の背景

(1) 伝説の背景にあるもの

昔話とよばれる地域に伝えられた伝説は、様々な民衆の想いが言葉を介して人づてに伝わり、今日に至ったものと思われる。これには地域に伝わる地名の由来や地域に起きた特異な出来事を伝えたものがあるだろう。

八郎太郎の伝説は、話が伝わり残された範囲が極めて広く、物語の内容も多岐にわたり様々な展開が存在する。

このことは、それぞれの地域に伝えられた伝説が主人公を介して結合し、逆に伝播した伝説が、それぞれの地域で生まれた話と結びついて展開しながら残された可能性を窺うことができる。

こうしてみると15世紀前半に成立したといわれる『三国伝記』や14世紀後半の『神道集』などには、法華経の功德によって大蛇や龍を調伏する説話が見られ、これらが八郎太郎伝説の共通の基盤を構成しているものと考えられる。

しかし、今回検討した八郎太郎の伝説は、南祖坊との争いや湖水形成譚に地名や地形が登場する場面が多々あり、漠然とした表現で物語が展開することが多い伝説の中にあって極めて特徴的なものではないかと考えられる。

また堰き止めに関わる伝説の場所には、河川沿いの小丘が登場し、八郎太郎の盛土と伝わるものは「ダイダラボッチ」伝説との共通性が認められる。さらに、八郎太郎が八郎潟に至る天瀬川の場面で登場する老夫婦は、「足名椎」と「手名椎」であり、芦崎の姥御前神社の周囲には娘の「櫛名田比売」を祀った神社も鎮座する。このことは、八郎潟に至って八郎太郎は、八龍として八岐大蛇の民間信仰に習合していることになる。

このように八郎太郎の伝説の背景には、詳細な場所を伝えるエピソードと巨人信仰や日本神話の姿が複合しているように見受けられる。こうした複雑な背景を有する物語の中から地域の伝承だけを抽出し、共通する意味を想像すると、そこにはどのような伝説の「失われた輪」が見えるのだろうか。これは今後の研究で大きな意味の「八郎」に関わる伝説を見通す鍵となるものと考えられる。

(2) 平川や浅瀬石川のラハール

近年、青森県津軽地方で埋蔵文化財の発掘調査から十和田 a テフラ起源のラハールが検出されている。

これらは浅瀬石川扇状地の前川遺跡(笹森他2009)や岩木川が形成した津軽平野に位置する五所川原市の十三盛遺跡(鈴木・佐藤2013)である。

前川遺跡では平安時代の水田を覆う層厚20～50cmの十和田 a 起源のラハール(柴2009)が検出された。また、

十三盛遺跡では層厚60cmのラハールが検出され、十和田 a テフラの噴火後にラハールが低湿地に流入したことで低地が埋まり、微高地が形成された(小野他2012)。

毛馬内火砕流は、火口から十和田湖を越えてカルデラ縁での堆積が認められることから平川や浅瀬石川の上流に達した可能性は極めて高い。しかし、これらの水系の上流部は十和田八戸テフラなどのカルデラから噴出した火砕流が急斜面や渓谷を形成しており、毛馬内火砕流の堆積面は認められない。毛馬内火砕流は急峻な地形のため、ほとんどが浸食によって下流域に運搬されたと考えられる。

十和田湖の北西に位置する青森県の津軽地方は、浅瀬石川上流や浅瀬石川と中野川の合流点、平川水系の大鰐盆地などで八郎太郎の伝説による湖沼形成譚が残された。これらの地域には河川の狭窄部に類似する地形が存在するが、上流からのラハールによって河床が上昇し、米代川流域のように大規模な滞水域を形成した可能性は低い。氾濫の証拠となる地形面やラハールは未発見であるが、限定的に浅瀬石川の合流部などでラハールによる氾濫が起こった可能性を否定しない。

また浅瀬石川扇状地の前川遺跡でラハールが水田を埋めている事実は、上流部の浅瀬石川をラハールが流れ下ったことを示す決定的な証拠である。

このように米代川流域以外に津軽地方の河川で八郎太郎の伝説と十和田 a テフラ起源のラハールが重複して存在することが認められる。

(3) ラハールを生み出した地形

考古学的手法を用いて火山災害を研究した丸山は、十和田 a テフラの噴火に伴う平安時代の青森県及び岩手・秋田両県北部の集落遺跡を集成し、災害に伴う平安時代集落の推移を分析した(丸山2011)。これによれば、岩手県馬淵川中流域や青森県奥入瀬川流域で噴火後に集落が急減し、青森平野も減少に転じたことが明らかで、これらの周辺では逆に集落遺跡が急増する。このことは火山災害により集落の移動を伴った人々の避難行動であった(丸山2015)。

古代社会において当時の生活基盤をなす水田や畠など、生産域が壊滅的な被害を受けることは、集落を維持する原動力を失うことになるだろう。

丸山の研究から米代川や浅瀬石川以外の地域でも噴火による災害が生じていたことは明らかで、十和田火山の周辺にある主要な大河川でラハールによる土砂災害が起きた可能性は極めて高いことが読み取れる。

しかし、毛馬内火砕流が及んだ地域は、火口から約20kmの範囲と考えられ、毛馬内火砕流のラハールが岩木川上流の西目屋や青森県南部地方、岩手県北上川などに直接の影響を及ぼすとは考えにくい。

それでは、どのような要因によって各地で土砂災害が

発生した可能性があるだろうか。第2図に湖水形成譚を生んだ地域と十和田 a テフラの分布や十和田カルデラの火砕流の分布を示す。

十和田火山から遠く離れた津軽平野の十三盛遺跡に達したラハールには十和田 a テフラ以外に微量なテフラが含まれ、ラハール以前の堆積物には十和田火山の複数のテフラ起源とされる火山ガラスが認められた(小野他2013)。前川遺跡でも同様にラハール以前の堆積物からは十和田八戸テフラ起源の火山ガラスや八甲田カルデラ起源の火山ガラスも認められた(柴2009)。

このようなテフラの再堆積は、十和田火山の周辺で平安時代の噴火以前から周辺の山地、丘陵や火砕流台地から恒常的にテフラが運搬・供給されていたことを示唆する。

そして平安時代の大規模噴火は、毛馬内火砕流や降下火山灰によって火山麓の植生破壊を進行させ、周辺の水系にラハールを生み出すトリガーとなった可能性がある。各地で生じたラハールは、過去の十和田カルデラから噴出した火砕流が斜面崩壊や土石流の発生により生み出した二次的なテフラではないだろうか。

こうして十和田 a テフラが降下した地域では、渓谷や河川の狭窄部や合流部で氾濫が多発し、米代川の八郎太郎の伝説が伝播した各地で、さらに新たな伝説を生み出したものと想定される。

7. 十和田 a テフラの噴火と災害

八郎太郎の伝説から解釈した知見と最近の火山地質学の成果は、どのような噴火と災害の姿を読み解くことができるのだろうか。以下は、伝説を軸に再構築した十和田火山の噴火エピソード A である。

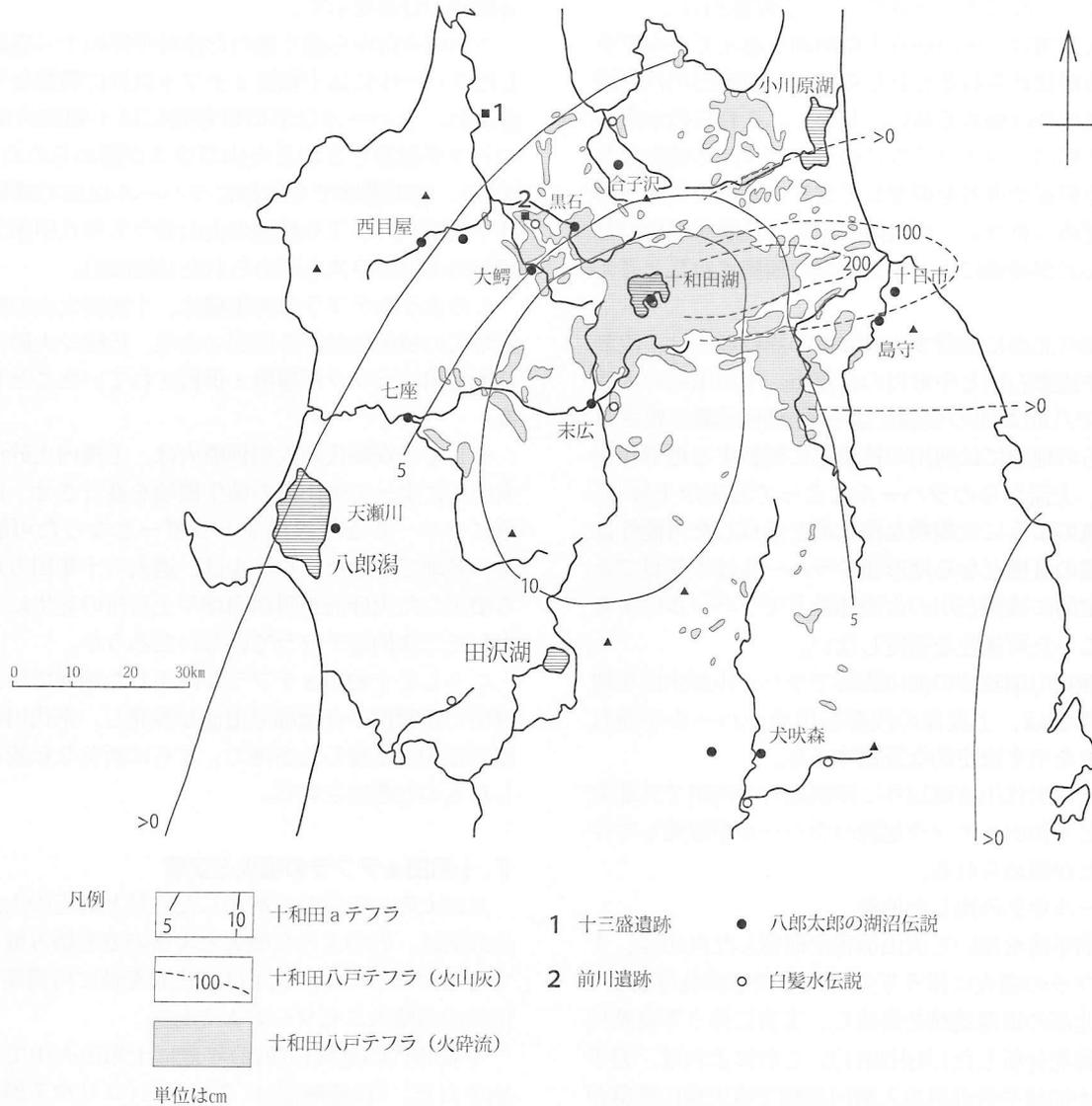
平安時代の延喜15(915)年夏に十和田火山で噴火が始まった。『扶桑略記』に7月5日(ユリウス暦の8月18日。以下同じ)に平安京では朝日に輝きがなく月のようだと記されたので、この日までに噴火のクライマックスによる降灰が近畿地方にまで達していた。

南祖坊と八郎太郎の戦いは7日7夜とされたが、物語の表現から噴火の経過を推定することは憚られる。仮に噴火を示すものが7日だと仮定しても、それは1日ではなく、また1ヶ月にわたらないイメージとしたい。

噴火が起こった火口は、争いの場面から中湖火口に比定される。最初に噴出した大湯軽石は、プリニー式噴火によってもたらされ、火口から北西20kmに層厚10cm程度が降下した。

大湯軽石や大湯火山灰の噴火は、マグマに湖水が積極的に関与した噴火と考えられた(広井他2015)。おそらく最初の噴火は中湖にかつて存在した五色岩火山と御倉山溶岩ドームの端に形成された火口で生じたのだろう。

噴火のクライマックスは7月5日(8月18日)以前で毛



第2図 八郎太郎の伝説地と十和田火山のテフラ テフラの分布はHayakawa(1985)、町田・新井(2003)による。

馬内火砕流と十和田 a テフラの主体をなす細粒火山灰が爆発的な噴火によって噴出したと考えられる。この噴火で五色岩火山の山体の一部は破壊され、水深300mを越える現在の中湖火口が形成された。また御倉山溶岩ドームの中湖側の崩落壁は、この時に形成されたのだろう。

毛馬内火砕流の基質には軽石に混じって黒曜石片が多く含まれる。これは大規模噴火でマグマと湖水が接触し、マグマの急冷相が大量に生産されたためかもしれない。

噴火が終息すると再び十和田湖は静寂が戻りつつあった。湖に到達した人々は新たな中湖火口の景色を目撃したかもしれない。そして火口壁にはかつて五色岩火山を構成していた溶岩が大きな崖となって現れた。

鮮やかな真赤色の溶岩は、マグマの鉄分が高温酸化し

たものだが、人々の心には争いに敗れた八郎太郎の流血を彷彿させるものがあったに違いない。

噴火は終息したが花輪盆地に達した毛馬内火砕流は大湯川や米代川を氾濫させ、盆地の出口にあたる末広を埋め立てた。こうして河川の狭窄部を塞がれて、盆地の広範囲で河川が氾濫した。

低地を水田にして微高地に集落を営んだ人々は、大湯川からもたらされる白砂と水没していく集落を眺めては、茫然と立ち尽くす他はなかった。これが十和田湖から追われた八郎太郎の姿である。大湯川を埋めた火砕流に取り残された集宮の小山は、シラスに出現した聖なる場所である。人々は特別に護られた場所として感じたのではないか。

やがて米代川は、狭窄部の土砂ダムを決壊させ、下流に洪水となって押し寄せた。七座山の麓の溪谷には、阿仁川からの流れも合流する。この場所でも再び土砂ダムを形成して、上流の盆地を滞水させたのだろう。やがてラハールは日本海側の能代平野まで到達するが、その頃には米代川を下る八郎太郎の噂が、北東北の各地に伝えられたことだろう。

『扶桑略記』の7月13日(8月26日)には出羽の国で灰が2寸積もり、桑の葉が枯れてしまったとの報告が北陸道を経由して平安京にも伝えられた。

前川遺跡でラハールに埋まった水田から、畦畔や田面に残る足跡、丈が60～70cmの根元から倒れたイネが検出されており、埋没した季節は出穂期の8月上旬と推定された。

915年8月に起きた噴火は、秋季の降水によって各地で同時多発的にラハールを発生させ、噴火後の数年から数十年は周辺地域の斜面が崩落し、大量の土砂が供給されて、洪水が多発する環境が継続したものと思われる。

低地を開発し経営した水田や島を失い、集落を捨てて移動した人々は、別の場所で新たな集落を形成した。

米代川を埋めた白砂は、水流で洗われた火山灰だから、やがて河原にはたくさんの砂鉄が濃集する。米代川を望む高台に移転した人々によって、鉄づくりの集落が営まれるのに、さほど年月は掛らなかった。

このように十和田火山の周辺地域にもたらされた大規

模な土砂災害は、各地で八郎太郎の伝説を共有する素地を生み出し、米代川流域を相形とした八郎太郎の伝説が各地の被災体験とともに共有されて、伝承が生みだされたのではないだろうか。

おわりに

筆者は1993年3月にフィリピンのピナトゥボ火山を調査した。火口から25kmほどのサンマルセリーノ[San Marcelino]の下流では、白砂が眩い火砕流の末端と河川を埋め尽くしたラハールの荒涼とした風景が広がっていた(写真21)。

1991年6月15日に噴火のクライマックスを迎えたピナトゥボ火山は、火山灰を高度34kmまで噴き上げ、火砕流は山頂の火口から16kmを流れ去った。この噴火で直径2.5kmのカルデラが山頂に形成され、噴火後には台風によって大量のラハールが発生した。この噴火は20世紀における世界最大の噴火となり、噴出したマグマの規模は10km³にも及んだ。

一方、平安時代の十和田aテフラの噴火は6.5km³とされ、大湯川を火砕流が流れ去った。20年前にフィリピンで見たシラスは、今から1100年前に大湯川で見られた風景に良く似た景色だったのかもしれない。



写真21 San Marcelinoの下流からピナトゥボ火山1991年噴火のラハールを望む

文献

- 赤石和幸1999「十和田火山, 毛馬内火砕流に伴う火山泥流堆積物中から平安時代の埋没家屋の発見」『地質学雑誌』105-12, pp13-14
 赤石和幸・光谷拓実・板橋範芳2000「十和田火山最新噴火に伴う泥流災害—埋没家屋の発見とその樹木年輪年代」『地球惑星科学関連合同大会予稿集』Qa-P009
 秋田県教育委員会(1968)『胡桃館埋没建物発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第14集, pp1-46
 秋田県教育委員会(1969)『胡桃館埋没建物第2次発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第19集, pp1-58
 秋田県教育委員会(1970)『胡桃館埋没建物第3次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第22集, pp1-46-61
 秋田県埋蔵文化財センター(2015)『片貝家ノ下遺跡見学会』現地説明会配布資料A3版。
 秋田県大湯村総務企画課(2008)「八郎太郎伝説」『大湯村百科事典』
 Web: <http://www.ogata.or.jp/encyclopedia/history/>
 荒谷由季子2009「埋没家屋と八郎太郎伝説について」『火内』大館郷土博物館研究紀要9, pp1-29

- 藤原健蔵1966「米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物の関係」『東北地理』12-2, pp33-40
 二ツ井町町史編纂委員会1977『二ツ井町史』pp.1-682
 Hayakawa Yukio 1985 Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Inst., Univ. Tokyo, 60, 507-592.
 早川由紀夫1993「火山の地質巡検案内2: 十和田湖」『群馬大学教育学部紀要自然科学編』41, pp53-78
 早川由紀夫・小山真人1998「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山」『火山』43-5, pp403-407
 平山次郎・市川賢一1966「1000年前のシラス洪水」『地質ニュース』140, pp10-28
 広井良美・宮本毅・田中倫久2015「十和田火山平安噴火(噴火エピソードA)の噴出物層序及び噴火推移の再検討」『火山』60-2, pp187-209
 板橋範芳2000「道日本遺跡埋没家屋調査概報」『火内』大館郷土博物館研究紀要1, pp28-53
 伊東一充1996「貞観十一年「陸奥国地大振動」と十和田火山についてのノート」『弘前大学国史研究』100, pp89-104
 鹿角市1996「八郎太郎」『鹿角市史』第4巻, pp694-697

- 川合勇太郎1970『ふるさとの伝説』津軽書房.pp1-330
 木崎和廣1976『羽後の伝説』第一法規出版.pp1-176
 小口雅史2002「北日本の指標テフラ「十和田 a」・「白頭山」火山灰をめぐる諸研究」『弘前大学國史研究』113.pp54-66
 小館衷三1976『水神竜神 十和田信仰』北方新社.pp1-208
 工藤崇2010「十和田火山、御倉山溶岩ドームの形成時期と噴火推移」『火山』2.pp89-107
 曲田慶吉1975『伝説乃鹿角』明治文献pp.1-168
 町田洋・新井房夫・森脇広1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51.pp562-569
 町田洋1995「古代の大災害が語る八郎太郎伝説」『講座[文明と環境]7 人口・疫病・災害』朝倉書店pp114-118
 町田洋1996「秋田県大湯における毛馬内火砕流と十和田 a テフラー八郎太郎伝説が示唆する十和田湖噴火災害」『第四紀露頭集—日本のテフラ』日本第四紀学会P.151
 町田洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺』東京大学出版会.pp1-336
 丸山浩治2011「テフラを指標とした古代集落研究の方法—青森県の平安時代集落を例に」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』8.pp7-27
 丸山浩治2015「考古学手法を用いた火山災害研究—10世紀の巨大噴火と東北地方北部における人間活動」『考古学研究』62-2.pp43-55
 森山泰太郎1976『陸奥の伝説』第一法規出版.pp1-183
 内藤博夫1963「秋田県鷹巣盆地の地形発達史」『地理学評論』36-11.pp655-668
 内藤博夫1966「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形」『地理学評論』39-7.pp463-484
 内藤博夫1970「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』48-10.pp594-606
 内藤博夫1977「秋田県能代平野の段丘地形」『第四紀研究』16-2.pp57-70
 南郷村中央公民館郷土の昔を語る会1982「八郎太郎」『むかしっこ』1.pp13-14
 奈良国立文化財研究所1990「暦年標準パターンを応用した研究」『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立』奈良文化財研究所学報48.pp100-101
 小形信夫1976『陸奥の伝説』第一法規出版.pp1-187
 大池昭二1972「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11-4.pp228-235
 大池昭二1976「十和田湖の湖底谷」『十和田科学博物館』2.pp65-73
 小野映介・片岡香子・海津正倫・里口保文2012「十和田火山AD915噴火後のラハールが及ぼした津軽平野中部の堆積環境への影響」『第四紀研究』51-6.pp317-330
 小野映介・片岡香子・海津正倫・里口保文・宮本真二2013「十三盛遺跡の地形・地質」『十三盛遺跡』青森県教育委員会.pp18-22
 大河内孝之2008「年輪年代調査」『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』北秋田市教育委員会.pp66-68
 坂本吉加1996『津軽の伝説3』北方新社.pp1-229
 佐々木孝二1990「北奥の民間信仰と伝承」『伝承文学論と北奥羽の伝承文学』北方新社.pp216-244
 笹森一朗・工藤忍・斉藤慶史2009『前川遺跡』青森県教育委員会394p
 柴正敏2009「田舎館村前川遺跡に産出する火山ガラスについて」『前川遺跡』第二分冊.青森県教育委員会.pp19-24
 白井哲之1966「米代川流域における含浮石質段丘砂礫層に関する地形学的研究」『地理学評論』39-12.802-819
 白鳥良一1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII宮城県多賀城跡研究所.pp1-38
 鈴木和子・佐藤智生2013『十三盛遺跡』青森県教育委員会.269p
 田口勝一郎1987『図説秋田県の歴史』pp63-67
 高橋学2006「十和田火山とシラス洪水がもたらしたもの」『十和田湖が語る古代北奥の謎』校倉書房.pp11-27
 戸川安章1975『羽前の伝説』第一法規出版.pp1-178
 山田一郎・井上克弘1990「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田—大湯浮石”の同定」『第四紀研究』29-2.pp121-130